

市民大学トラム 短大が目指す人材の『地産地消』

— キャリアプランニング科のめざすもの —

今 泉 仁 志

はじめに

少子化に伴い、大学・短大の全入時代を迎えた。定員割れに直面する短大も増えてきた。受験生の選別も事実上困難な状況に直面し、基礎学力が不足している学生もある程度受け入れ、入学後の教育力で対応することが求められるようになった。教育の成果として卒業時点での「教育目標達成」や「就業力育成」、いわゆる「出口保証」が実社会から要請されている。それを実現するため、各大学・短大は、「アドミッションポリシー」「カリキュラムポリシー」「ディプロマポリシー」を明示して対応するようになった。

キャリアプランニング科が直面する問題は、科の性格上、将来の進路や取得したい資格が明確でない学生を受け入れていることである。それらの学生に対して、動機付けをし、基礎学力を補強し、興味を持った専門分野の知識・スキルを伸ばし、人間的に成熟させて社会に送り出すべく努力している。

1. 大学の「入口」と「出口」

現在、大学・短大についてはいろいろなことが言われている。二極化ということでは、「研究志向」の大学と「職業訓練志向」の大学、「一般教養・専門知識」中心の大学と「資格取得」中心の大学、定員充足率ということでは「勝ち組」と「負け組」といった分類である。概して言えることは、実学志向が非常に強まっていることである。本学でも、理学療法士、看護師（保健師、助産師）、幼稚園教諭免許・保育士資格、介護福祉士などの国家資格が得られる学科は定員を充足している。

かつての大学には、ある意味、浮世離れた面があり、「人生いかに生きるべきか」「何のために生きるのか」「いったい、ものは何からできているのか」「宗教とは何か」「人間は死んだらどうなるのか」というような、根源的で答えのない問題に取り組み、語り合い、悩む一群の学生達がいた。このごろでは、短期的な見返りを求める学生が増え、就職に有利と思われる資格取得に関心が高い。もちろん、大学生には幅広い視野を持つ訓練が要請されている。

たとえば、現在、日本全体は漠然とした不安感・閉塞感を打破できずにいる。いろいろな問題が相互に関連し、問題を一つひ

とつ、つぶしていけばよいという状況ではない。我々が抱えている問題を少し列挙してみても、以下のようになるが、問題が相互に絡み合っているのがよくわかる。

- ・ 少子高齢化，総人口の減少，外国人の移入
- ・ 赤字国債，年金問題，医療保険・介護保険，生活保護費用，税の負担
- ・ エネルギー問題，資源問題，食料自給率
- ・ アジア外交の緊張，防衛問題，核問題
- ・ 政治の不安定，日本の国力，産業の空洞化，憲法改正
- ・ 環境問題，食の安全，放射能汚染
- ・ 就職率，非正規雇用，フリーター，引きこもり，早期離職
- ・ 教育問題 人生の目的や規範意識の希薄化

大学には、学生に対し、個々の専門分野の知識獲得に加え、上記のような問題に対し自分なりの意見を持てるような教養・見識を養うことが期待されている。また、「何のために生きるのか」といった本源的な問いと向き合ったことのない学生は、人生のいろいろな局面でつまづきが多く、メンタルタフネスの面で将来問題を起こすようになる。

大学の入口という点からは、「入学してくる学生が目的意識、将来への希望、拠り所とする規範、などに正面から取り組んだことがない」ことが大きな課題になる。

大学の出口という観点からは、「高学歴化に伴い数多くの入学生を受け入れ、大学卒業生を増やしてはきたが、大学生の能力にふさわしい就職先を企業社会と連携して用意してきたわけではない」点が課題である。

2. 短大の状況

18歳人口の推移を見ると、直近では「団塊ジュニア」と呼ばれる世代が1992年に205万人いたのが、その後減少を続け2011年には120万人で、ピーク時の約6割になっている。その間、四年制大学は、523校/52万人入学（1992年）から778校/62万人入学（2010年）へと一貫して増え続けている。短大に関しては、短大から四年制大学への高学歴化に伴い、591校/25万人入学（1992年）から395校/7万人入学（2010年）へと、激減している。18歳人口が減っている上に、短大へ進学する割合が減っているため短大の入学定員確保は非常に厳しい状況である。

私立大学・短大では定員割れが起き始めている。定員確保のため、早い段階から学生を集めるようになってきている。本来の一般入試ではなく、AO入試、推薦入試の段階で入学生を確保する動きとなる。早い段階で入学先を決めてしまいたい高校生と、同じく早い段階で入学定員を確保したい大学側の意向が一致したとも言えるが、弊害として高校生の学習意欲が3年生の秋ごろから低下してしまうことである。大学側は、しっかり「受験勉強」をしてこなかった高校生を受け入れることになる。

就職状況も厳しい。いわゆる「製造業の空洞化」により、現場にしる事務職にしる、工場自体の求人が減っている。高卒にも現場の仕事が無くなってきているのである。必然的に第三次産業への就職ということになるが、総人口の減少により第三次産業のマーケット自体が縮小している。従来、短大生が就職していたような職業にも四大大生が参入してきている。

高校までの教育では、「個性を伸ばす教

育」が強調され、一律な教育を見直されるようになってきた。高校生には、自分の適性を自覚して進路を決めるように「自己責任」が言われるようになったが、なかなか進路を決められない高校生を追い詰める面はあったのかもしれない。高卒時点で就職先が見つけれず、何になりたいのかもわからない学生をも短大は受け入れているのである。

3. 「わかる」ということ

既に述べたように、現代の学生は、短期的な見返りを期待するようになっていて、勉強にとりかかる前から、

「これを勉強したら、なんかいいことありますか」

「これを勉強したら、何か資格がとれますか。その資格は就職活動で役に立ちますか」

といった質問をするのである。

ものごとを理解するためには根気が必要である。新しい分野を学ぶためには、その分野で使われている専門用語を覚え、いままで知らなかったことを教員から教えられて、これまでの知識とつながったときに初めて理解できたことになる。言葉でいくら説明しても学生にはわからず、体験させるとわかることがある。特に新しい知識を得たのではないのに、今までの知識が構造化され、なぜかが突然わかることがあるのである。

現在の学生の欲求に応えることは、もちろん大事なことだが、いまは何のために勉強しているのかわからないが、将来、ふと勉強しておいてよかったと思えることがある。とにかく、学生は自分が勉強したいことを今勉強しておくことである。それが将

来、きっと役立つはずだからと学生にくどく言うが、説得力はないようだ。学生は、本当は、やっておいたほうがいいこと、やっておかなければ将来損をするということは直感的に分かっているはずだ。自分の気持ちに忠実に従った学生が、将来報われるというわけである。

4. 魅力ある若者を育てるために

数年前までは、内定率は100%に近い数字だったが、このごろでは最終的に90%程度の数字にとどまっている。就職先もなかなか決まっていけないのが実情である。印象で言えば、順調に内定がとれる学生が20%、なんとか内定がとれる学生が20%、なかなか内定がとれない学生が60%である。基礎学力・専門分野の学力を身につけ、資格を取得しても、面接で落ちてしまう。人間的に魅力をつけるにはどうしたらよいのだろう。即効性はないが、7つのことを学生に勧めている。

(1) にこやかな挨拶の励行

— 「和顔愛語」 —

きちんとした身だしなみ・姿勢で、愛想よく挨拶ができることは、基本である。

中には、相手と話をするとき、きちんとアイコンタクトができない学生がいる。

(2) きれいなことばを使うこと

ことばが持つ力は大きくて、きれいなことばを使っていると、人柄が上品になっていく。

(3) 「ありがとう」が言えること

ここで挙げた「ありがとう」は象徴的な代表例であり、「お先に」、「どうぞ」、

「失礼いたしました」、「どういたしまして」、といった人間関係を円滑にすることが自然と出てくるようになることが大事である。自分の気持ちを素直に表現できることは大切であり、好感度が増すはずである。

(4) 自分らしさを自覚すること

面接で「自己PRをしてください」「長所・短所を教えてください」と聞かれたときに、何を答えていいのかわからないという学生がいる。自分でいくら頭の中で考えても、自分が何者であるのかはわからない。自分がどういう人間であるのかは自分で決めるのではなく、まわりが教えてくれることである。自分を知るためには、集団生活から教えてもらう必要がある。

(5) 感動すること

—感動を共有すること—

感動することで、自分がどういうことに感動するのか自分の好みがわかる。感動を友人や家族に言葉で伝えることで、自分と他人の受け取り方が違うことがわかる。こういったことを通して自分の価値観が形成されていき、自分が何者かがわかるようになる。

(6) 自分の感情とうまくつきあうこと

いろいろなことを体験すると、自分の感情をコントロールできるようになる。読書は、文学を通して多様な感情を理解するよい機会である。自分と同じようなことを考えている他者がいて、それが実にうまく表現されているのを見て、自分の感情を客観的にとらえられるようになる。読書を通して、感性が豊かになり、メンタル・タフネスも育成されていく。

(7) 関係をつくること

既に存在する組織に協調性をもって馴染んでいくことも大事だが、新しい関係を作り出すことも必要である。新しいアイデアを出し、皆の賛同を得てプロジェクトを進めていく。こういったことができるようになれば素晴らしい。

5. 短大のこれから

短大の多くは、共学化・四大化の道を歩んでいる。本キャリアプランニング科は、頑なに女子のみを受け入れている。社会人として通用する基礎力・教養を基盤として、医療事務／一般事務／パソコン／調理／介護といった専門分野から興味のある分野を勉強するやり方は、今後も踏襲していく。地域社会とのつながりをもったグループワークを通じて、主体性・社会性を育てていくことは現在挑戦している課題である。